

西暦××年……………とある流行病によって世界中から牛が消えた……………

そう牛乳の枯渇である。他にヤギなど……………代用の乳はあれど牛乳とは味が異なる為、牛乳に変わる飲料が画策された。

世界中が代用に走る中……………ついに！！それに変わる画期的な！！飲料が開発された！！！！

そう、人間の女性の乳から搾り出される液体、【メス乳】である……………

それからはや数百年、すっかりメス乳は世間に浸透して牛乳の名前も教科書に載るだけの遠い過去となった。

そんな中高校卒業を間近にした僕は春の陽気に微睡みつつ隣の席の女子達がわいわいと話しているのを盗み聞きする。

「ねえ、あんたほんとにあそこ行くの？」

「うん」

「やめときなって、どんな方法で生産されてるのか未だに明かされてないんだよ？」

「うーん、でもさー、メス乳には毎日お世話になってるじゃん？大好きだし……………今度は私が生産者になって皆に喜んで貰いたいんだ」

と、話すのは隣の席に座る洛陽丑奈さん。あまり話したことはないけど大人しそうな性格で……………

メス乳生産会社に自ら行きたいと言うのも頷けるほどプロポーションをお持ちだ。

何度彼女の身体にお世話になったことか……………それにしても彼女はどこの会社に行くんだらう。

牛乳も数多の酪農牧場があったしメス乳を生産する箇所も今では数え切れないほどになっている。

そしてそのせいか、今の時代では自然と女性の人数が男性よりも多くなりつつあったのは置いといて。

実は僕はとあるメス乳生産会社に高校卒業後、管理側として入社する予定だった。

もしも……………彼女と同じ会社で切磋琢磨にメス乳を生産出来たら嬉しいな……………と淡い期待を胸に抱えた。

その生産する過程がとても想像出来ないくらい凄まじい方法とは知らずに――

「入社おめでとう早速だがメス乳を生産する工場に案内しよう」

入社して初日に僕はとある工場に案内された。僕の他にも新入社員がたくさんいて全員男性だ。

厳重管理された衛生対策を施し専用の作業服へと着替える。……………？なぜだかすぐに下半身がさらけ出せるような構造になっている？……………トイレ……………遠いのか……………

移動すること十数分、いよいよこの扉を開けば工場の中だ。それにしても監視カメラもあるし扉も工場にしては厳重でここまでする必要はあるのか？と思うくらいゴツくて重い。「さて今から入るがここの女性達を勝手に逃げないように気をつけてくれ、そうなった場合逃がした人間に重い処罰が待っているからな」

「は、はい……………逃げる……………？」

まるで逃げる事を許されないみたいじゃないか……………と思った僕の目に映ったのは。

「おらっ……………メス乳だせ……………！」

「いっくぐううううう!!……!!乳出しますうううう!!……!!……!!」

と、管理している男性社員にこき使われて乳からメス乳を出している女性達の姿だった

………